

# 千代田区を対象とした橋詰空間の変遷

藤田 景<sup>1</sup>・高柳 蓮<sup>2</sup>・福井 恒明<sup>3</sup>

<sup>1</sup>学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻  
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:kei.fujita.2c@stu.hosei.ac.jp)

<sup>2</sup>非会員 さいたま市役所  
(〒330-9588 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-4-4, E-mail:liangaoliu0@gmail.com)

<sup>3</sup>正会員 工博 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科  
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

江戸期の橋詰空間はレジャーとしての見世もの、情報センターとしての高札場、流通センターとしての魚河岸と、多様な都市機能を持ち、街路と水辺をつなぐ公共空間であった。現在の都内の橋詰空間は、その空間自体は残っていることが多いが、フェンスで囲われていたり、植栽が生茂っているなど、空間として有効活用されている場所は少ない。今後、橋梁の改修工事や都市の開発が進む際、橋詰空間が街路と水辺をつなぐ公共空間として注目されるために、橋詰空間の歴史的特性や空間的特徴の変遷過程や社会的な位置づけを把握し、橋詰空間の在り方を議論するための知見を得ることが重要である。そこで本研究では、明治から現代における橋詰空間の存在や設置施設の変遷過程を地図資料を用いて整理した。その結果、震災や戦争の復興事業や高度経済成長期の高速道路建設など、都市の発展に伴って橋詰空間の利用方法が多様化したことを明らかにした。

**キーワード:** 橋詰空間, 千代田区, 地図資料, 変遷

## 1. 序論

### (1) 研究背景と目的

橋詰空間とは、橋に取りつく道路の幅員よりも橋の幅員の方が狭かったために必然的に橋詰に広場的な余地が生まれた空間<sup>1)</sup>のことである。江戸期の橋詰空間はレジャーとしての見世もの、情報センターとしての高札場、流通センターとしての魚河岸<sup>2)</sup>と、多様な都市機能を持ち、街路と水辺をつなぐ公共空間であった。関東大震災後の帝都復興事業の際には、橋詰空間の大きさ、設置施設が制度化され<sup>3)</sup>、橋梁架換時の仮橋敷地や材料置き場、交番、便所など様々な機能を持つ空間として注目されていた。

現在の都内の橋詰空間は、その空間自体は残っていることが多いが、フェンスで囲われていたり、植栽が生茂っているなど、空間として有効活用されている場所は少ない。近年行われている橋梁の改修工事では、橋梁本体や親柱、高欄などについては検討されることが多いが、橋詰空間が整備された事例は少ない。

今後、橋梁の改修工事や都市再開発が進む際、橋詰空間が街路と水辺をつなぐ公共空間として注目されるために、橋詰空間の歴史的特性や空間的特徴の変遷過程や社会的な位置づけを把握し、橋詰空間の在り方を議論する

ための知見を得ることが重要である。

そこで本研究では、明治から現代における東京都心部の橋詰空間の存在や設置施設の変遷過程を明らかにすることを目的とする。

### (2) 既往研究

橋詰空間を対象とした既往研究には、橋詰空間の経緯や成立に関するものとして、旧東京市日本橋区京橋区を対象に帝都復興時の橋詰空間の概要を整理した伊東ら<sup>4)</sup>の研究、下町3区墨田・江東・中央を対象に帝都復興時と現在の橋詰空間の設置施設の比較を行った高畑ら<sup>5)</sup>の研究、中央区を対象に戦災復興期以降の橋詰空間の変遷を明らかにした伊東ら<sup>6)</sup>の研究、帝都復興事業区域を対象に現在の橋詰空間の状況を明らかにした伊東ら<sup>7)</sup>の研究がある。この他に、橋詰空間のデザインや利用実態に関するものとして、旧東京市市街地地域を対象に空間特性と利用実態に着目し、現在の橋詰空間の実態を明らかにした伊東ら<sup>8) 9)</sup>の研究、万世橋を対象に橋詰空間の変遷や現代の使われ方を明らかにした伊東<sup>10)</sup>の研究、江戸後期の橋詰のデザインを規定する要因を明らかにした堀ら<sup>11)</sup>の研究がある。

これらの研究は、対象期間が、江戸時代、橋詰空間の大きさや設置物が初めて制度化された帝都復興時、震災

復興時と現在の2時点、震災復興時・高度経済成長期・現在の3時点と限定的である。橋詰空間がどのような社会背景のもとで変化してきたのかを知るためには、継続的な変遷過程を確認しておくことが有用であると考えられる。

### (3) 研究方法

本研究では、明治から現代における橋詰空間の存在や設置施設の変化について地図資料を用いて整理することで、橋詰空間の変遷を把握する。

## 2. 研究対象

### (1) 対象地

本研究は東京都千代田区全域を対象とする(図-1)。

千代田区は、明治期以来の東京の中心であり、日本の中でも近代的都市空間が早くから整備されてきた地域である。千代田区は、1888年の東京市区改正新設計による市街地と周辺の整備、1923年の関東大震災による市街地のほぼ全域焼失とその後における帝都復興事業、昭和20年代の東京大空襲などの戦火による焼失とその後における戦災復興事業、1960年代の高度経済成長期の都市の開発等、数々の大きな都市の変化に伴い計画事業を展開してきた地域である。このように千代田区では、明治期以来の近代化や災害、経済成長によって大きく都市空間が変貌し、社会や時代の要請に応じて空間が変化してきた。この変化は、橋詰広場にも大きな影響を与えてきたと考える。

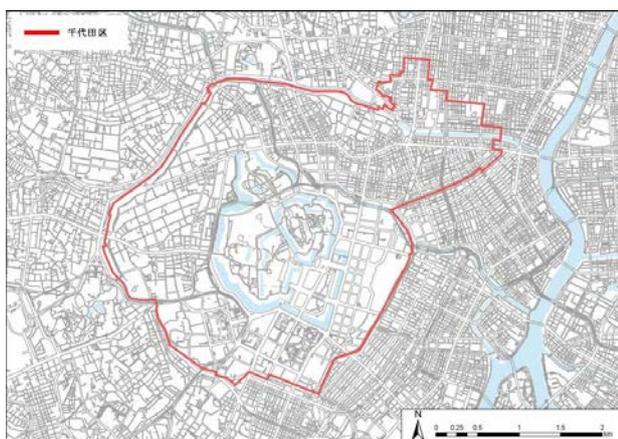


図-1 本研究の対象範囲<sup>12)</sup>

### (2) 対象橋梁

「新編千代田区史<sup>13)</sup>」, 「千代田まち辞典<sup>14)</sup>」, 「東京の橋 100選+100<sup>15)</sup>」より、千代田区に明治以降存在した橋梁、全84橋を抽出した。千代田区に現存する橋梁は47橋、廃橋となった橋梁は37橋である(表-1, 表-2)。本研究では、橋梁が区境に架橋されている場合、す

表-1 千代田区に現存する橋梁一覧

番号	橋名	架橋場所	形式	架橋年月
1	弁慶橋	濠地(外濠)	RC2径間連続T桁橋	大正 15. 12(1926)
2	喰違橋	濠地(外濠)	土橋	
3	四谷見附橋	JR跨線橋	方丈鋼ラーメン橋	大正 2. 9(1913)
4	新四谷見附橋	JR跨線橋	鋼2径間単純桁橋	大正 14. 10(1925)
5	市ヶ谷橋	濠地(外濠)	RC連続桁橋	昭和 2. 12(1927)
6	新見附橋	JR跨線橋	鋼単純桁橋	昭和 4. 7(1929)
7	牛込橋	JR跨線橋	鋼2径間連続単純箱桁橋	昭和 3. 5(1928)
8	飯田橋	神田川	単純合成桁	昭和 4. 11(1929)
9	小石川橋	神田川	鋼単純桁橋	昭和 2. 12(1927)
10	後楽橋	神田川	鋼2ヒンジアーチ橋	昭和 2. 11(1927)
11	水道橋	神田川	鋼橋	昭和 3. 6(1928)
12	お茶の水橋	JR跨線橋・神田川	鋼3径間ラーメン・ゲルバー桁橋	昭和 6. 5(1931)
13	聖橋	神田川	鋼橋・RC橋	昭和 2. 7(1927)
14	昌平橋	神田川	RCアーチ橋	昭和 5. 2(1930)
15	万世橋	神田川	コンクリートアーチ橋	昭和 5. 9(1930)
16	和泉橋	神田川	鋼桁橋	昭和 5. 3(1930)
17	美倉橋	神田川	鋼2ヒンジアーチ橋	昭和 4. 2(1929)
18	左衛門橋	神田川	鋼2ヒンジアーチ橋	昭和 5. 9(1930)
19	三崎橋	日本橋川	鋼単純桁橋	昭和 29. 3(1954)
20	新三崎橋	日本橋川	RC3径間連続桁橋	大正 15. 12(1926)
21	あいあい橋	日本橋川	単純鋼床版箱桁橋	平成13(2001)
22	新川橋	日本橋川	鋼3径間ゲルバー桁橋	昭和 2. 8(1927)
23	堀留橋	日本橋川	RCアーチ橋	昭和 3. 8(1928)
24	南堀留橋	日本橋川	鋼3径間ゲルバー桁橋	昭和 3. 8(1928)
25	組橋	日本橋川	SAスラブ桁橋	昭和 4. 6(1929)
26	宝田橋	日本橋川	鋼単純箱桁橋	昭和 4. 11(1929)
27	雉子橋	日本橋川	鋼2ヒンジアーチ橋	昭和 2. 11(1927)
28	一ツ橋	日本橋川	鋼橋・RC橋	大正 14. 11(1925)
29	錦橋	日本橋川	RC開側式アーチ橋	大正 15. 8(1926)
30	神田橋	日本橋川	鋼橋	大正 15. 4(1926)
31	鎌倉橋	日本橋川	RCアーチ橋	昭和 4. 3(1929)
32	新常盤橋	日本橋川	鋼箱桁橋	昭和 4. 12(1929)
33	常磐橋	日本橋川	RCアーチ橋	明治 10. 6(1877)
34	常盤橋	日本橋川	石造りアーチ橋	大正 15. 12(1926)
35	竹橋	大手濠	RC3連アーチ橋	大正 15. 5(1926)
36	平川門橋	大手濠	木造(石造)桁橋	昭和63年(1988)
37	大手門橋	大手濠	土橋	
38	桔梗門橋	桔梗濠	土橋	
39	坂下門橋	二重橋濠	土橋	
40	二重橋	二重橋濠	鋼アーチ橋	昭和39年(1964)
41	和田倉橋	和田倉濠	鉄筋コンクリート橋	昭和28年(1953)
42	馬場先門橋	馬場先濠	土橋	
43	祝田橋	馬場先濠	土橋	
44	桜田門橋	桜田濠	土橋	
45	半蔵門橋	半蔵濠	土橋	
46	田安門橋	牛ヶ淵	土橋	
47	清水門橋	清水濠・牛ヶ淵濠	土橋	

表-2 廃橋となった橋梁一覧

番号	橋名	架橋場所	撤去年	撤去理由
48	呉服橋	外濠川	昭和25(1950)	外濠川の埋め立てにより撤去
49	八重洲橋	外濠川	昭和25(1950)	外濠川の埋め立てにより撤去
50	鍛冶橋	外濠川	昭和25(1950)	外濠川の埋め立てにより撤去
51	有楽橋	外濠川	昭和34(1959)	外濠川の埋め立てにより撤去
52	新有楽橋	外濠川	昭和34(1959)	外濠川の埋め立てにより撤去
53	丸之内橋	外濠川	昭和34(1959)	外濠川の埋め立てにより撤去
54	教寄屋橋	外濠川	昭和34(1959)	外濠川の埋め立てにより撤去
55	山下橋	外濠川	明治末年	外濠川の埋め立てにより撤去
56	幸橋	外濠川	明治末年	外濠川の埋め立てにより撤去
57	新幸橋	外濠川	明治末年	外濠川の埋め立てにより撤去
58	新し橋	外濠川	明治末年	外濠川の埋め立てにより撤去
59	虎ノ門橋	外濠川	明治37(1904)	外濠川の埋め立てにより撤去
60	龍閑橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
61	白幡橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
62	西仲之橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
63	今川橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
64	東仲之橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
65	地藏橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
66	火除橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
67	九道橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
68	甚兵衛橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
69	玉出橋	竜閑川	昭和25(1950)	竜閑川の埋め立てにより撤去
70	葵橋	溜池	明治末年	溜地の埋め立てにより撤去
71	溜池橋	溜池	明治末年	溜地の埋め立てにより撤去
72	日吉橋	溜池	明治末年	溜地の埋め立てにより撤去
73	赤坂門橋	溜池	明治末年	溜地の埋め立てにより道路の一部へ
74	柳原橋	岩井川	昭和25(1950)	岩井川の埋め立てにより撤去
75	大和橋	岩井川	昭和25(1950)	岩井川の埋め立てにより撤去
76	岩井橋	岩井川	昭和25(1950)	岩井川の埋め立てにより撤去
77	橋本橋	岩井川	昭和25(1950)	岩井川の埋め立てにより撤去
78	竹森橋	岩井川	昭和25(1950)	岩井川の埋め立てにより撤去
79	銭瓶橋	道三堀	明治42(1909)	道三濠の埋め立てにより撤去
80	道三橋	道三堀	明治42(1909)	道三濠の埋め立てにより撤去
81	龍之口橋	道三堀	明治42(1909)	道三濠の埋め立てにより撤去
82	日比谷門橋	日比谷濠	明治6(1873)	日比谷濠の埋め立てにより撤去
83	秋葉橋	外神田堀割	昭和後期	船溜りや堀の埋め立てにより撤去
84	佐久間橋	外神田堀割	昭和後期	船溜りや堀の埋め立てにより撤去

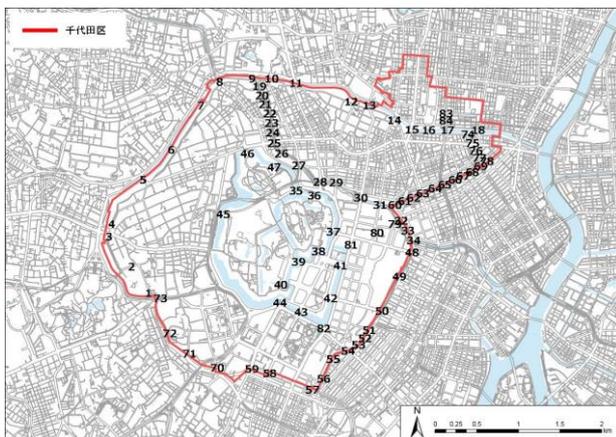


図-2 対象橋梁の分布 (参考文献<sup>12)</sup> に加筆)

べて千代田区の橋梁としてカウントしている。

対象とする橋梁の位置を示す(図-2)。

### 3. 橋詰変遷調査

#### (1) 調査に用いる資料

明治から現在における橋詰空間の存在や設置施設の変化を把握するため、地図資料を用いて橋梁ごとに整理を行う。

橋詰空間が確認できる資料は、古地図、都市計画図、住宅地図等の地図資料や、古写真、図絵、空中写真等が挙げられる。地図資料、空中写真では橋詰空間の存在や設置施設を読み取ることができ、古写真、図絵では橋詰空間の様子を詳細に確認することができる。しかし空中写真の場合、植栽と建物以外の情報を読み取ることはできず、橋詰空間の存在を確認することが困難である。古写真の場合、橋梁本体を写した古写真は多く存在するが、橋詰空間を写した古写真は少ない。また、図絵の場合においても一部の橋梁を対象に描写したものが多く偏ってしまっている。そのため、本研究では、対象である全橋梁の橋詰空間の様子を読み取ることができる地図資料を用いる。

本研究で用いる地図資料は、明治・昭和期に発行された古地図、昭和期に発行された都市計画図、昭和・平成・令和に発行された住宅地図を取り扱い、期間は明治9年(1876)から令和2年(2020)までの19時点を対象とする(表-3)。

表-3 地図資料一覧

年号(年)			資料名
1870年代	1876	明治9	明治東京全図
1880年代	1887	明治20	東京全図
1890年代	1895	明治28	東京実測全図
1910年代	1911	明治44	番地界入東京全図
	1912	大正元年	地籍台帳地籍地図
1920年代	1919-1922	大正8-11	番地界入東京全図
1930年代	1930-1932	昭和5-7	大東京市各区别地図
	1934	昭和9	大東京区分地図 全三十五図
	1934-1935	昭和9-10	火災保険特殊地図
1950年代	1951	昭和26	東京都五千分之一地形図
	1948-1955	昭和23-30	火災保険特殊地図
	1956-1959	昭和31-34	東京三千分之一
1960年代	1963	昭和38	東京都都市計画図 用途地域
1970年代	1970	昭和45	東京都都市計画図 用途地域
	1978	昭和53	ゼンリン住宅地図 千代田区
1980年代	1986	昭和61	ゼンリン住宅地図 千代田区
1990年代	1998	平成10	ゼンリン住宅地図 千代田区
2000年代	2010	平成22	ゼンリン住宅地図 千代田区
	2020	令和2	ゼンリン住宅地図 千代田区

## (2) 調査方法と読み取り内容

表-3の各地図資料から、1橋に対して右岸左岸・上流下流の4箇所、合計84橋336箇所の橋詰空間の存在と設置施設を確認する。橋詰空間の有無は、橋梁の幅員に対して広がりを読み取ることができれば「有」と判別し、設置施設が確認できない場合は「有」かつ「空地」とした(図-3)。

設置施設に関して、1876年から1959年にかけての古地図では、「公衆電話」「派出所」の地図記号、「見附」の地図表現が判別できる(図-4、図-5)。都市計画図では、「派出所」が判別できる。1912年、1934-1935年、1948-1955年、1978年以降の住宅地図では、「派出所」「公衆トイレ」「公園・児童遊園」「自動電話」「倉庫」「駐車場」「高速道路の出入りランプ」「改札口」「橋詰所」の表記が判別できる(図-6)。なお、橋梁が架かっていない場合は「未架橋」としたが、廃橋後も形状や設置施設から痕跡が確認できるものについては引き続き取り扱った。



図-3 地図資料の読み取り①



図-4 地図資料の読み取り②



図-5 地図資料の読み取り③



図-6 住宅地図の読み取り

## (3) 調査結果

### (a) 橋詰空間数の変遷

橋詰変遷調査の結果、各年代において確認できた橋詰空間数を架橋場所別に表-4に示す。

### (b) 橋詰空間用途の変遷

橋詰変遷調査の結果、「空地」「派出所」「公園・児童遊園」「公衆トイレ」「自動電話」「見附」「高速道路の出入りランプ」「駐車場」「改札口」「地下鉄出入口」「橋詰所」「倉庫」の11つの設置施設・用途数が確認できた。各年代の確認できた橋詰空間の設置施設・用途数を表-5に示す。

## 4. 考察

### (1) 考察の時代区分

橋詰変遷調査により、1888年の市区改正、1923年の関東大震災、1945年の太平洋戦争、1960年代の高度経済成長期によって橋詰空間に変化が見られた。そこで、これらの出来事、内容の変化によって年代を区分し、1870年代・1880年代、1890年代～1910年代、1920年代・1930年代、1940年代・1950年代、1960年代・1970年代、1980年代～2000年代に分け、橋詰空間の変遷・使われ方について考察する。

### (2) 1870年代・1880年代

表-4より、1870年代から1880年代にかけて外濠・神田川、竜閑川、岩井川の橋詰空間が増加していることが分かる。これは、この時期に竜閑川・岩井川に橋が多く架橋されたため、橋詰空間も増加した。

表-5より、この時期の橋詰空間はほとんどが空地であることが分かる。これは1873年に明治政府が「葎簀張床店取除きの布令<sup>16)</sup>」を出したことにより、橋詰空間や広小路に床店が無くなったことが大きな要因であると考えられる。これにより江戸期にあった橋詰空間の賑わいが失われていったといえる。

### (3) 1890年代～1910年代

表-4より、1890年代から1910年代の橋詰空間は、194箇所から217箇所と少し増加傾向にあることが分かる。

表-5より、この時期の橋詰空間には空地や派出所、自動電話が増加していることが分かる。これは、1888年の東京市区改正新設計に伴う道路・橋梁の新設により、橋詰空間が整備されたものだと考えられる。これにより、橋詰空間の使われ方が1870年代・1880年代と比較して多様化していった。

### (4) 1920年代・1930年代

表-4より、橋詰空間が増加していることが分かる。

表-5より、この時期の橋詰空間は1920年代～1930年代にかけて空地が減少し、派出所や公園、公衆トイレが増加していることが分かる。

これは、1923年の関東大震災後の帝都復興事業において橋詰空間の設置や路上工作物配置基準が初めて制度化され、千代田区内にも整備がされたことの流れと見られる。

派出所に関しては、明治期から橋詰空間に存在していた見附の管理・監視としての機能が派出所として引き継がれ、設置されたと考える。設置場所は表-6より、外濠・神田川に多く分布している。当時、神田川沿いには

表-4 年代・架橋場所ごとの橋詰空間数

		現存			埋め立て								合計
		外濠・神田川	日本橋川	内濠	外神田堀削	外濠川	竜閑川	溜池	岩井川	道三濠	日比谷濠		
1870年代	1876	28	20	42	0	28	8	6	0	8	2	142	
1880年代	1887	38	20	43	0	32	36	6	18	8	0	201	
1890年代	1895	46	20	43	4	26	24	6	17	8	0	194	
1910年代	1911	49	32	43	4	14	40	10	17	0	0	209	
	1912	52	35	43	4	16	40	10	17	0	0	217	
1920年代	1919-1922	53	25	43	4	12	40	4	17	0	0	198	
1930年代	1930-1932	57	31	43	4	16	36	4	13	0	0	204	
	1934	56	48	41	4	22	34	4	14	0	0	223	
	1934-1935	56	48	41	4	22	34	4	14	0	0	223	
1950年代	1951	49	44	37	4	16	2	4	0	0	0	156	
	1948-1955	48	43	36	4	16	2	4	0	0	0	153	
	1956-1959	48	34	37	4	2	2	2	0	0	0	129	
1960年代	1963	53	33	39	0	0	7	0	0	0	0	132	
1970年代	1970	51	33	38	0	0	7	0	0	0	0	129	
1970年代	1978	47	40	41	0	0	8	0	0	0	0	136	
1980年代	1986	50	42	38	0	0	8	0	0	0	0	138	
1990年代	1998	51	39	37	0	0	8	0	0	0	0	135	
2000年代	2010	47	42	37	0	0	7	0	0	0	0	133	
	2020	45	40	37	0	0	7	0	0	0	0	129	

表-5 年代・橋詰空間用途ごとの橋詰空間数

		空地	派出所	公園・児童遊園	公衆トイレ	自動電話	見附	高速道路の出入り ランプ	駐車場	改札口・地下鉄 出入口	橋詰所	倉庫
1870年代	1876	101	0	0	0	0	34	0	0	0	0	0
1880年代	1887	153	0	0	0	0	36	0	0	0	0	0
1890年代	1895	179	2	0	0	3	12	0	0	0	0	0
1910年代	1911	181	14	0	0	7	12	0	0	0	0	0
	1912	173	14	0	0	7	12	0	0	0	0	0
1920年代	1919-1922	164	16	0	0	6	10	0	0	0	0	0
1930年代	1930-1932	178	13	0	0	1	10	0	0	0	0	0
	1934	168	32	3	16	5	0	0	0	0	0	0
	1934-1935	152	32	3	16	5	0	0	0	0	0	0
1950年代	1951	121	13	6	7	0	0	0	0	0	0	0
	1948-1955	115	16	7	9	0	0	0	0	0	0	0
	1956-1959	99	14	15	1	0	0	0	0	0	0	0
1960年代	1963	95	15	21	1	0	0	0	0	0	0	
1970年代	1970	89	14	21	1	0	0	3	0	0	0	0
	1978	85	12	23	2	0	0	3	0	2	0	0
1980年代	1986	63	15	25	9	0	0	5	2	8	2	2
1990年代	1998	57	15	26	13	0	0	5	3	11	2	3
2000年代	2010	57	15	27	10	0	0	5	4	11	1	3
	2020	54	15	27	10	0	0	5	5	11	0	2

飯田町駅、水道橋駅、御茶ノ水駅等の中央本線が開通していた。また隣接する道路の幅員も広く、人が密集するため、この地域に派出所が多く設置されたと推測できる。

表-6 1934-1935年 架橋場所ごとの派出所数

架橋場所	数	架橋場所	数
外濠・神田川	14	溜池	1
日本橋川	5	岩井川	3
内濠	2	道三濠	0
外神田堀削	0	日比谷濠	0
外濠川	2	合計	32
竜閑川	5		

(5) 1940年代・1950年代

表-4より、橋詰空間が大きく減少していることが分かる。

表-5より、空地が大きく減少しており、1950年後半から公園・児童遊園が増加していることが分かる。

1946年の太平洋戦争による復興都市計画の際、瓦礫処理のために東京の多くの河川が埋め立てられた。千代田区内の河川も外濠川・竜閑川・岩井川が埋め立てられ、多くの橋梁・橋詰空間が失われた。一方で、埋め立てられた竜閑川の橋詰空間が存在していた場所に、児童遊園が多く整備されている。この要因としては、1947年に公布された児童福祉法<sup>17)</sup>が挙げられる。児童福祉法第40条より、「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、情操を豊かにすることを目的<sup>18)</sup>」に、児童厚生施設と

して児童遊園の設置が促進された。そのため千代田区でも多くの児童遊園が整備され、その設置場所として橋詰空間が利用されたと考えられる。

## (6) 1960年代・1970年代

表-4より、橋詰空間数の合計に大きな変化は見られないが、埋め立てられたはずの竜閑川が増加している。

表-5より、空地が減少しており、公園・児童遊園が増加している。これは1950年代と同様に、児童の遊び場の確保のために多くの橋詰空間が利用された。1978年の橋詰空間に設置されている公園・児童遊園は、外濠神田川・日本橋川・竜閑川である(表-7)。これらは旧神田区の範囲に多く設置されていた。

また、1970年代から高速道路の出入りランプや改札口といった交通施設が増加している。これはこの時期に首都高速道路が建設されたことにより、高速道路と一般道路の結節点となる橋梁の橋詰空間に多く設置されたと考えられる。

表-7 1978年 架橋場所ごとの公園・児童遊園数

架橋場所	数	架橋場所	数
外濠・神田川	8	溜池	0
日本橋川	7	岩井川	0
内濠	0	道三濠	0
外神田堀削	0	日比谷濠	0
外濠川	0	合計	23
竜閑川	8		

## (7) 1980年代・2000年代

表-4から、橋詰空間数の合計に大きな変化は見られない。

表-5から、公衆トイレ、高速道路の出入りランプ・改札口・駐車場といった交通施設、橋詰所、倉庫が増加していることが分かる。交通施設が大きく増加した要因として、1970年代と同様に、高度経済成長期に入り交通量の増加や交通機関の発達で橋詰空間の利用に影響を与えたと考えられる。

## 5. まとめ

### (1) 結論

本研究では、地図資料を用い、明治から現代における橋詰空間変遷の整理を行った。

明治期の橋詰空間は、1888年市区改正事業の道路・橋梁の新設と共に整備されたことで、空地から派出所、自動電話と用途を持つ空間へと変化した。その後1923年の帝都復興事業により橋詰空間が制度化され、派出所・公衆トイレが増加した。戦後から現在における橋詰

空間は、瓦礫処理のための河川埋め立てや高速道路建設によって数が大きく減少した。一方で、公園・児童遊園、公衆トイレといった人が滞留する空間や、駐車場や高速道路の出入りランプといった交通施設としての空間が増え、橋詰空間の利用用途が多様化した。

### (2) 今後の課題

橋詰空間の変化要因を行政資料等の文献から精査し、設置施設ごとの変化についてより考察を深めていく必要がある。加えて、対象地域を拡充し、地域ごとの特徴を明らかにし考察する必要がある。

### 参考文献

- 1) 社団法人土木学会：美しい橋のデザインマニュアル，pp.56-57，社団法人土木学会，1982
- 2) 伊東孝：東京の橋 水辺の都市景観，p210，鹿島出版会，1986
- 3) 復興事業局：帝都復興事業誌 土木篇上巻，復興局，pp.57-58，1932
- 4) 伊東孝祐，秋山哲男，伊東孝，溝口秀勝：震災復興橋詰広場計画の経緯と成立，土木史研究，第18巻，pp.93-101，1998
- 5) 高畑充宏，伊東孝，秋山哲男，伊東孝祐，溝口秀勝：震災復興橋詰広場にみる施設と分布 一丁目3区(墨田・江東・中央)を事例として，総合都市研究，第65号，pp.95-106，1998
- 6) 伊東孝祐，秋山哲男，伊東孝，溝口秀勝：戦災復興計画以降の震災復興橋詰広場の変容について，土木史研究，第19巻，pp.31-39，1999
- 7) 伊東孝祐，伊東孝，川西崇行：帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況—東京を対象として，土木史研究，pp.199-202，2010
- 8) 伊東孝祐，山川仁，秋山哲男，琴基正：橋詰広場のデザイン的特徴と利用特性 一旧東京市市街地域を例として，総合都市研究，第43号，pp.87-97，1991
- 9) 伊東孝祐，琴基正，山川仁，秋山哲男：橋詰広場の空間的扱いとその利用特性，都市計画論文集，第26巻，pp.43-48，1991
- 10) 伊東孝：絵地図にみる橋詰広場施設と景観の移り変わり，日本土木史研究発表会論文集，第6巻，pp.98-207，1988
- 11) 堀繁，篠原修，溝口伸一：伝統的橋詰のデザイン規範，土木史研究，第10巻，pp.93-102，1990
- 12) 千代田区：千代田区都市計画情報提供ポータル <http://xn-https-xil.jn65ke18a6cn//tokei-gis2.chiyodatoshikei.jp/toshikei/apps/webappviewer/index.html?id=d4e4fecb90b24bc190e6e82e2d3b471a> [最終閲覧日2021年8月30日]
- 13) 東京都千代田区：新編千代田区史 区政史資料編，pp.379-380，1998
- 14) 東京都千代田区：千代田まち辞典，pp.179-181，2005
- 15) 紅林章央：東京の橋 100選+100，pp.39-79，2018
- 16) 伊東孝：東京の橋 水辺の都市景観，p.216，鹿島出版会，1986
- 17) 東京都千代田区：新編千代田区史 年表・索引編，p.215，1998.
- 18) 厚生労働省：厚生白書 昭和51年版，第4編pp.16-17，1976